慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会学と優生学 : ロンドン社会学会における「都市学」と「優生学」
Sub Title	Sociology and eugenics in 1904 : Geddes' civics and Galton's eugenics at sociological society (part B Historical sociology of the body and public life, historical sociology of a city, a public, and the body)
Author	皆吉, 淳平(Minayoshi, Jumpei)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.259- 289
JaLC DOI	
Abstract	Sociological Society held in 1904 is one of the pioneering sociology meetings. It is said that the special features in a series of meetings of the first year of this society were "Civics" of Patrick Geddes and the "Eugenics" of Francis Galton. These both were positioned as what bears "applied sociology" in the society. It does not consider that "Civics" and "Eugenics" are the learning domain which bears sociology now. However, at the pioneering sociology meeting in early the 20th century, both were considered to be the important domains of sociology. Then, the purpose of this paper is to consider the relation of "Eugenics" and "Civics" in the first Sociological Society. While Geddes was an urban study person, he studied biology and has also left the writing about evolution. It ranks with Galton which was a hereditary researcher, and it can be said that it was in the boundaryofbiologyandsociology.Bycomparingboth.itseems that the end of the relation between clarifying a part of research of Geddes who is the buried sociologist, simultaneously sociology and eugenics of those days also becomes clear.
Notes	特集都市・公共・身体の歴史社会学-都市社会学誕生100年記念- B編 身体と公共の歴史社会学 論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0263

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会学と優生学

——ロンドン社会学会における「都市学」と「優生学」——

皆　吉　淳　平*

Sociology and Eugenics in 1904

—Geddes' Civics and Galton's Eugenics at Sociological Society—

Jumpei Minayoshi

Sociological Society held in 1904 is one of the pioneering sociology meetings. It is said that the special features in a series of meetings of the first year of this society were "Civics" of Patrick Geddes and the "Eugenics" of Francis Galton. These both were positioned as what bears "applied sociology" in the society. It does not consider that "Civics" and "Eugenics" are the learning domain which bears sociology now. However, at the pioneering sociology meeting in early the 20th century, both were considered to be the important domains of sociology.

Then, the purpose of this paper is to consider the relation of "Eugenics" and "Civics" in the first Sociological Society. While Geddes was an urban study person, he studied biology and has also left the writing about evolution. It ranks with Galton which was a hereditary researcher, and it can be said that it was in the boundaryofbiologyandsociology.Bycomparingboth,itseems that the end of the relation between clarifying a part of research of Geddes who is the buried sociologist, simultaneously sociology and eugenics of those days also becomes clear.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

1. はじめに

1-1 本稿の目的

近年，社会学の研究において多様な視点から「身体」や「生命」に関心が集まっている．身体や生命への考察を進めるときに，社会学的研究は価値の問題に直面する．つまり，社会学にとって優生学 (eugenics) や優生思想を無視できなくなってきている．しかしながら，それは近年になって初めてのことではない．社会学と優生学には重なり合う部分があると言われている．そして，20 世紀初頭のロンドンの社会学会は都市学者と優生学学者とが微妙な緊張関係をはらみながら結成されたのである．

1904 年に創設されたロンドン社会学会 (Sociological Society) は，先駆的な社会学会の一つである．この学会の初年度の一連の会合での呼び物は，パトリック・ゲデス (Patrick Geddes) の「都市学 Civics」とフランシス・ゴルトン (Francis Galton) の「優生学 Eugenics」であったと言われている (Meller, 1979: 72)．この両者は，初年度の社会学会での報告をまとめた『*Sociological Papers*』の「序文」において，「応用社会学 applied sociology」を担うものとして位置づけられている．「都市学」も「優生学」も，現在では社会学を担う学問領域であるとは見なされていない．けれども，20 世紀初頭の先駆的な社会学会においては，両者は社会学の重要な領域と考えられていたのであった．

そこで本稿の目的は，第一回ロンドン社会学会における「優生学」と「都市学」との関係を考察することにある．ゲデスは都市研究者であると同時に，生物学を学び，進化についての著作も残している．遺伝の研究者であったゴルトンと並んで，生物学と社会学との境界にいたと言える．両者を比較することによって，埋もれた社会学者であるゲデスの研究の一部を明らかにすることと同時に，当時の社会学と「優生学」との関係の一端も明らかになると思われる．

ところで科学史家の米本昌平は，ナチス・ドイツの優生政策への科学史的な研究（米本，1989）において，ゴルトンが第一回ロンドン社会学会に参加していたことも先駆的に紹介している[1]．米本はハリデイの論文(Halliday, 1968)を参照しつつ，1904年にロンドン社会学会が設立された時には，ソーシャルワーク派，都市計画派（ゲデスら）に並んで，「少数派ではあったが，ゴルトンやピアソンらの優生学派の参加は，当然のこととして迎えられた」と述べている．そして，「今世紀初め，社会学が学として組織化されようとしたとき〔中略〕，〔優生学と社会学が〕新興の社会諸科学の一翼として，なんらかの形で重なり合うことは，この時代の世界的な趨勢と受けとられたのであった」と続けている（米本，1989: 82 f)．それでは，「この時代の世界的な趨勢」とは，どのようなものなのだろうか．また，「なんらかの形で重なり合う」とは，どのように重なり合っていたのだろうか．そして，これらの問いは，次の問いに答えることにもなる．なぜ，ゴルトンの「優生学」報告の場が第一回ロンドン社会学会だったのか．

以下では，まず一般的な意味での優生学を確認し，米本による上記の問いへの解答を確認する(**2.**)．その上で，共に応用社会学を担うとされたゴルトンの「優生学」報告と，ゲデスの「都市学」報告との間に，どのような「重なり合い」があったのかを具体的に確認してゆく(**3.**)．それらを踏まえて，ゴルトンの「優生学」報告がなぜ社会学会でなされたかについて

[1] 日本における明治期以降の優生学（の思想と運動）の歴史をまとめた鈴木善次の研究においても，当然のことながらゴルトンの1904年の報告には言及されている（鈴木，1983: 46ff)．しかしながら，そこには，「ロンドン大学で講演した際に」との記述があるのみで，社会学会での報告だったことには言及されていない．つまり，この講演が「社会学会」のものであったことが意識されていないか，あるいはこのことに意味があると考えられていなかったことがわかる．なお，その後の鈴木の研究（鈴木，1991）では，「ロンドン大学での第一回イギリス社会学会」と記述されている．

の解答を探る (4.). 最後に，本稿による優生学と都市学との比較対照が，報告から一世紀を経た我々の社会学に対してどのような含意をもたらしているのかを提示する (5.). 本論に入る前に，まずは優生学の現代的意味を確認しておこう.

1-2 優生学と現代社会

「優生学 eugenics」は『種の起源』で有名なチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) のいとこ，フランシス・ゴルトンが生み出した言葉である. ゴルトンは「優生学の父」と呼ばれている. そしてゴルトンが社会学会で行った報告「優生学――その定義，展望，目的[2]」(Galton 1905) は，優生学史を扱う研究では必ずと言っていいほど触れられる重要なものである.

ゴルトンの定義を確認する前に，優生学を「人間のさまざまな身体的精神的特徴に優劣をつけ，生殖への人為的介入によって，「優れた者」の出生を奨励し「劣った者」の出生を防止することを目指す理論，研究，思想，運動等の総称」（松原，2002a）と暫定的に考えるならば，優生学の研究は「人種衛生学」を生み出した 19 世紀ドイツの医師シャルマイヤーとプレッツにも求められる. その後の衝撃的な実践という歴史からか，ドイツにおける社会(科)学と生物科学，あるいは優生学の実践における科学者の果たした役割に関する研究は数多い. しかしここで留意せねばならないのは，優生学がナチス・ドイツだけのものだったのではないということである. 第二次世界大戦まで，優生学は生物学・医学に基づく新しい応用科学として広く脚光を浴びていた. 確かにドイツのヒトラー政権ではアーリア民族至上主義のもとで優生学的な政策が採用され，ホロコーストや精神障害者の虐殺が行われた. その結果，戦後の優生学は，生物学的決定

[2] 本稿ではこの報告のことを，「ゴルトン報告」あるいは「「優生学」報告」と表記している.

論によって差別や虐殺を正当化するものとして，タブー視されるようになった．けれども優生学は，19世紀末以降の欧米諸国にとどまらず，明治時代の日本はもちろん，第二次世界大戦後を含めて世界各国に浸透していたのである[3]．

さらに優生学は現代の社会学にとっても，無視できない領域である．現代社会においても優生学的な要素を有する研究や運動，実践の数は決して少なくない．出生前診断の結果を踏まえた選択的妊娠中絶や，(旧)優生保護法や母体保護法をめぐる社会的問題に対しては，現在でも議論が途絶えることはない．これらの議論が優生学あるいは「優生思想」に対する批判的視角からなされていることはよく知られている．選択的妊娠中絶は，それが選択であることにおいて，生まれてくる予定の子どもの生命を選別していると考えられるのだ．さらに法による生殖への介入は，フェミニズムの論点であると同時に，優生学の性格を備えるものである．それだけではない．近年の生命科学の進展，特にヒトゲノム・プロジェクトと遺伝子組換え技術の進展は，望ましい（遺伝的性質を持った）人間を出産する可能性に現実味を帯びさせた．これらの技術や科学をめぐる研究に対して，優生学的な要素が見出されている（例えば，Lock, 2002）．優生学が展開していた19世紀末から20世紀にかけて唱えられていた優生学を推進するロジックと，昨今の生命科学を推進するロジックに潜むものが酷似していしていると言われている．人間の身体をその探求の対象とする学問は，そ

[3] イギリス，アメリカ，ドイツ，北欧，フランス，日本については米本らの研究(米本ほか，2000)，ドイツ，フランス，ブラジル，ロシアについてはアダムズのもの(Adams (ed.), 1990=1998)，イギリスとアメリカを中心とした包括的な優生学史についてはケヴルズ(Kevles, 1985=1993)，特に日本の展開については鈴木(1983)などを参照．ナチス・ドイツにおける優生学については，これらのほかに数多くある．ニュルンベルク裁判における医の倫理の課題を明らかにする中で，ドイツ，フランス，アメリカなどの優生政策にも言及している平易な文献としては，アンブロセリのものがある(Ambroselli, 1988=1993)．

の生命における優劣などの「価値」を不可避的に伴うことで，常に優生学との距離が問題となるのである．人間の身体にまつわる諸現象を解明することは，いわゆる科学だけではなく，哲学，そして社会学にとっても重要な課題である．このような意味で，社会学も優生学と無縁ではない．そして，現代社会を探求の対象とする社会学は優生学を無視することができない．なぜなら現代社会においては，優生学と接近するような科学技術がフロンティアとして位置づけられているのである．

このように優生学は100年前の社会学会で重要な一領域と認識されただけではなく，現代にも通じる問題領域なのだと言える．それでは，この優生学の起源の一つである，ゴルトンによる「優生学」報告とはどのようなものだったのかを見てゆこう．

2. 社会学，優生学，都市学

2-1 ゴルトンという人物

まずは簡単にゴルトンという人物について触れておこう[4]．フランシス・ゴルトンは，遺伝の法則で有名なメンデルと同じ1822年にバーミンガムの豪商の家系に生まれた．ゴルトンは幼いときから優秀で，ロンドン大学医学部に入学，しかしケンブリッジ大学数学科に転学，卒業後再び，医学課程に戻った．その後，エジプトから南アフリカへの旅を経験した後に，アフリカ大陸の地理調査の業績が認められ，科学者としての地位を確立した．科学分野に数学的手法を導入することに多くの業績を上げたのだが，その業績は広範にわたっている[5]．おそらくイギリスで初めての天気図を発表したとも言われている．また指紋の渦巻き構造の数学的分析の先

[4] 以下のゴルトンについての伝記的な紹介は，主にケヴルズ(Kevles, 1985=1993: 10ff)による．

[5] 例えば岡本(1987)は，ゴルトンの心理学的業績に注目しつつ，その包括的な紹介を行っている．なお岡本の著作は，ゴルトンの学術的および伝記的な資料を包括的に紹介している数少ない日本語の文献である．この文献については，東京大学大学院の土屋敦氏からご教示いただいた．

駆者ともなっている．けれども，なぜゴルトンが遺伝における優生学的分析に取り組むようになったのかは定かではない．ゴルトンは名家の女性と結婚したが，子どもに恵まれなかったということが，彼を優生学的研究に駆り立てたとも言われている[6]．ともかくもゴルトンは，人類学的調査に数学的手法を導入し，能力の遺伝についての研究の中で1883年に初めて「優生学」という言葉を使ったとされている．このゴルトンの弟子でありよき理解者，そして研究仲間であったのが統計学者カール・ピアソン(Karl Pearson)であり，彼は後述する1904年の「優生学」報告が行われた社会学会において司会（議長）を務めている．

2-2　社会学におけるゴルトンと「優生学」

ところで，社会学においてゲデスと彼の「都市学」は長らく埋もれた存在だった．それに対してゴルトンと「優生学」はどうだったのだろうか．

ゴルトンについては，その統計的な研究業績への貢献と，優生学に対する業績とが，辞典・事典の中に見出される．1968年刊行の『*International Encyclopedia of the Social Science*』の索引にあるゴルトンという項目には，それが明瞭に現れている．関連項目として挙げられているうち，人名を書き出すと，知能テストで有名なビネー(Alfred Binet)，心理学者のカテル(James McKeen Cattell)，正規分布を考案したガウス(Carl Friedrich Gauss)，統計学者であったピアソン(Karl Pearson)，人類学者のタイラー(Edward Burnett Tylor)の名がある．これらは，人類学的調査に数学的（統計的）手法を導入した事が重視された結果であろう．そして，事項にも統計的手法に関する項目が並ぶ．その一方では，もちろん「優生学 eugenics」という項目が抜け落ちていることはない．しかしながら，ゴルトン自身について書かれた項目に「優生学」と「社会学」との連接を

[6] ゴルトン自身は回想録の中で，ダーウィン『種の起源』が刺激となったと書いているが，はっきりとした理由は知られていない(Kevles, 1985=1993: 17).

見出すことは難しい．なぜなら，4頁半に及ぶ項目中，優生学に触れられているのはわずか1頁の五分の一ほどであり，そこでは優生学の名付け親であったことと，1904年に設置されたロンドン大学の優生学のポストのこと，さらにそのポストに就いたピアソンやフィッシャーによって統計的手法が発展したことが述べられているに過ぎない．つまり，ゴルトンが1904年のロンドン「社会学会」で「優生学」について報告したことはもちろん，1904年に報告したこと自体にも触れられていないのである．ゴルトンと「社会学」とをつなぐ糸は，統計的手法のみで，そこに「優生学」はなかった[7]．

このような傾向は日本の辞典・事典類にも見ることができる．1958年刊の有斐閣『社会学辞典』において，「ゴルトン Galton」という欧文人名索引の項目は見当たらない．けれども同じ有斐閣から1993年刊の『新社会学辞典』になると，欧文人名索引にゴルトンの名が見られる．そこで挙げられているのは三項目で，「回帰分析」「性格」「パーソナリティ形成」である．ここにわれわれが期待するような「優生学」という項目は現れていない．それどころか「優生学」という項目自体がこの『新社会学辞典』には存在していない．つまり，ゴルトンと「社会学」を媒介するものに「優生学」はなかったのである．

一方で，1988年刊の弘文堂『社会学事典』には，ゴルトンの名前で「優生学」という項目にだけ辿りつくことができる[8]．ただし，この「優生

[7] ゴルトンに発する「優生学」と社会学が，「統計」で深く関わっていたということに関しては，統計という科学的知識が社会的に構成されたものであることを明らかにしたマッケンジーのものがある．この研究はSSK（Sociology of Scientific Knowledge 科学知識の社会学）を代表するモノグラフとして，またゴルトンや優生学と社会学とを結ぶ研究として重要である (Mackenzie, 1981)．SSK およびSSK を含む科学社会学や科学論におけるマッケンジーの位置については金森 (2000, 2002) を参照．

[8] 逆にゴルトンの統計的手法への業績が反映されていない構成は，奇妙に思える．

学」という項目を執筆しているのは，科学史家の米本昌平であり，加えて1904年のロンドン社会学会への言及はもちろん，ない[9]．つまり，「優生学」が社会学の対象として認識されてきたとは言い難い状況なのではないだろうか[10]．それでは，現在の社会学においては必ずしも明瞭に見出されていない，社会学と優生学との「重なり合い」とはどのようなものだったのだろうか．次にそれを確認しよう．

2-3　優生学と社会学との重なり合い

社会学と優生学との一般的な親和性については，「社会ダーウィニズム(social Darwinism)」と「実証主義(positivism)」がキーワードとされてきた．「進化論」がダーウィンにより画期的な展開を迎え（『種の起源』1859年），その基盤となる遺伝法則としてメンデルの再発見（1900年）がなされた時代[11]．それが，社会学と優生学の双方が制度として誕生した20世紀初頭であったからだ．

ダーウィンの『種の起源』によって典型的に示されたのは，キリスト教的な歴史観や世界解釈に対する挑戦であった．科学史家である米本昌平は

---

[9] 米本がロンドン社会学会でのゴルトン報告のことを知らないとは考えにくい．それゆえ，この『社会学事典』で「ロンドン社会学会」に言及されていないのは，「言及に値する事実ではない」と考えられたのではないかと思われる．

[10] ただし鈴木善次は社会学者・建部遯吾の『優生学と社会生活』（雄山閣，1932年）を参照しつつ，次のように述べている．「わが国で「ユーゼニックス〔Eugenics〕」を「優生学」と訳したのは社会学者建部遯吾のようである」（鈴木，1991: 99）．なお建部遯吾は日本社会学会の前身となる「日本社会学院」創設を主導したと言われている．本稿は世界初の社会学会の一つと言われるロンドン社会学会と「優生学」との関係を考察するもので，日本の事情にはこれ以上触れないが，日本の社会学の歴史という視点から「優生学」を捉える試みも可能なのではないかと思われる．

[11] 科学の展開という視点から加えれば，アインシュタインによる相対性理論等の主だった業績が発表されたのも同時期（1905年）であった．

生物学的な進化論に導かれるように展開された「キリスト教的世界解釈に対する一群の経験論的な代案」のことを「自然科学主義 (Scientific Naturalism)」と呼んでいる[12]. この自然科学主義を背景として「人間やその社会を，ダーウィン的原理を通して解釈しようとする試み」である「社会ダーウィニズム」が現れ，社会ダーウィニズムの諸学説に基づいた生活改善運動の一つが優生学であった（米本，1989: 42ff; 米本ほか，2000: 15）.「とりわけ優生学などは，超越論的な世界解釈から離脱し，その上で新興の自然科学によって人間が自らその運命を改良しようとする意図を強く持っていたという意味で，いわばキリスト教的救済史観の世俗化であった」とも言われている（米本，1989: 46）. この時代の西欧の価値体系において高い地位にあった自然科学に立脚した優生学は，広範な議論を呼び起こし，受容されていったのだった.

他方で社会学は明確な定義を持たず，「社会学者は漠然とコントやスペンサーと同じように，まず基盤には物理学があり，その上に生物学があり，そのさらに上に社会学がのるという図式を抱いていた」と述べられている（米本ほか，2000: 22）. それゆえ，当時の社会学的探求はそのもっともシンプルな理解において，人間の生物学的進化を前提にしていたか，あるいは並行するものだったと考えられているのだという (Halliday, 1968: 377).

こうして，自然科学的で経験的な実証というアイディア (positivism) と進化論の社会への適用である社会ダーウィニズムが，社会学と優生学との重なり合いとして理解されることになる.

[12] 米本は自然科学主義を，「人間のふるまいやその社会までも含む一切の現象を，非擬人主義的，非超自然的，自然科学的に統一的に解釈しようとする哲学的傾向」で，具体的には，「唯物論，一元論，自然主義，実証主義，自由思想，不可知論などの基本に流れる姿勢」としている（米本ほか，2000: 15）. 米本 (1989) でも同様の記述があるが，若干の修正がなされているため，より新しいものを紹介した.

しかしながら，より具体的に，社会学の重要な領域と見なされていた都市学と優生学の両者の関係を検討するものは驚くほど少ない．そのような状況でゲデス研究者のメラーは，1904年と1905年のゲデス「都市学」報告に対する付記で，次のようにゲデス報告と優生学との関係を記していた．「ゲデスは，〔中略〕フランシス・ゴルトン氏の優生学も都市学のための枠組みとして見逃してはいない」．「ゲデス自身は論文の中で，優生学を彼の主題である都市学の全体としての目的として語っていた．地域的社会調査の結果であるべき社会事業は，諸個人の物理的で社会的な福祉 (well-being) のための計画となるべきであり，それは優生学者の目的である社会有機体における改良を導くであろうものだった」(Meller, 1979: 72–3)．つまり，ゲデスの都市学にとって優生学は，その目的を伴う枠組みを提供するものだったというのである．

このように，優生学と社会学，あるいは優生学と都市学との「重なり合い」が理解されている．それでは，ゴルトンの「優生学」報告とゲデスの「都市学」報告を具体的に検討することで，この「重なり合い」の実際を見てゆこう．

3.　都市学と「優生学」との重なり合い

3–1　ゴルトンの「優生学」報告

やや遠回りした感は否めないが，まずはゴルトン自身の「優生学」について見てゆこう．ゴルトンが初めて「優生学 eugenics」という言葉を使ったのは1883年と言われている．そこでは次のように，「eugenics」という言葉を説明している．「良い血統」「遺伝的に高貴な資質に恵まれていること」を示すギリシャ語の eugenes に由来するもので，「血統を改良する科学を意味する．それは，賢明な交配〔結婚〕の問題に決して限られるものではなく，生存により値する人種または血統に対し，劣った人種あるいは血統よりも，より速やかに広まる機会を与える」すべての影響力を

認識するもの，という意味である (Galton, [1883] 2001: 17; cf. Kevles, 1985=1993: 3; 鈴木，1983: 46)．また人種と淘汰についての章では，優れた血統や人種を古いものから置き換えることを含むとも述べている (Galton, [1883] 2001: 199f).

既に優生学という言葉が使われていた[13]，という意味では，第一回ロンドン社会学会でのゴルトンの報告に新鮮味はないかもしれない．しかしながら，ゴルトンの「優生学」にとってこの報告は重要な意味を持っていた．それというのも，ゴルトンは1901年の人類学会で「既存の法と感情の下における人種の改良の可能性」という論文を発表し，好意的な感触を得た．そして1903年にはピアソンが人類学会のハクスリー記念講演で，「人間の身体的形質と精神的形質は，広い幅の範囲内を量的に同じ程度遺伝するとの一般的結論に達せざるを得ない」と演説した．このピアソンの報告で，「優生学」を発展させるための基礎ができたとゴルトンはピアソンに賞賛の言葉を与えたという．ピアソンの知見は，人間集団に生物学的な操作を加えれば，永続的に形質を改良できる可能性を示していたのであった．ゴルトンとピアソン，そしてウェルダン (Walter F. R. Weldon) は1901年に『バイオメトリカ *Biometrika*』という専門雑誌を発刊し，生物学に統計理論を持ち込んだ生物測定学を手法の中心とする学派の基礎を確立していた．これらを基礎として，ゴルトンの「優生学」というアイディアは1904年のロンドン社会学会での報告に結実したのである (Kevles, 1985=1993: 59; 米本ほか，2000: 19)．つまり，満を持して，優生学を定義し，その目的と展望とを述べたのが，「優生学」報告なのであった．

---

[13] さらに，ケヴルズ (Kevles, 1985=1993) によれば，ゴルトンが優生学に関わる見解を初めて公表したのは，1865年の論文（のちに『遺伝的天才』(1869年) としてまとめられるもの）であった．もちろんこれは，「優生学」という言葉を作り出す以前のことであった．

1904年にブランフォードらの尽力で創設されたロンドン社会学会は，ロンドン大学で行われた同年5月16日の会合(meeting)に，最初の報告者としてゴルトンを招いた．この時の報告は「優生学――その定義，展望，目的」と題され，優生学史において必ずと言っていいほど言及されるものとなっている(Galton, 1905)．それでは，この報告の内容に入ろう．

ゴルトンは報告の冒頭で「優生学」を次のように定義している．「優生学とは，ある人種の生得的質の改良に影響するすべてのもの，およびこれによってその質を最高位にまで発展させることを扱う科学である」．この定義に続いてゴルトンが説明するのは，「優生学」において「改良」の対象となるのが道徳的な人格(character)の良し悪しではないということである．それは論争的な事柄で同意の得られるようなものではないからである．その一方で，「優生学の本質(essentials)は容易に定義できる」と言う．それは「病んでいるよりも健康的な方が良く，弱々しいよりも活発な方が良く，そして人生では自分に適さない役割よりは適している方が良い」というものである．「要するに〔中略〕，その悪い見本(specimens)であるよりも良い見本であることの方が，より望ましいのである」．こうしてゴルトンは，「優生学」の目的(aim)を「それぞれの階級や分派をその最良の見本によって代表させること」，そしてその上で，「彼ら〔代表された見本となった人々〕に，それぞれのやり方で共通の文明(common civilisation)を築きあげることを任せること」だとする[14]．

この代表を選ぶ際に考慮される資質のリストには，「健康，活力，能力，男らしさや礼儀正しさが含まれる」．またこれら以外にも芸術的才能など

[14] ここで興味深いのは，優生学がダーウィンの進化論をその基礎とするのであれば当然言及されるであろう「淘汰 selection, select」という言葉は全く使われていないという事実である．その代わりに，「代表 represent」という言葉が使われている．もちろん，代表する（見本となる）ためには選出(elect)という契機が含まれ，選出は淘汰（選択）と内容的に同じものと考えることもできる．

の特別な素質 (aptitude) がある．これら質のリストを例示した上でゴルトンは，もう一つの「優生学」の目的を示す．それは「道理にかなう範囲で (reasonably) 最大限の影響力を行使することで，コミュニティにとって有用な階級が，〔現在，人口に占めている〕割合以上に，次の世代〔の人口〕へと寄与できるようにすることである」．

こうしてゴルトンによる「優生学」の輪郭は明確にされた．つまり「優生学」は，人々の良い見本となる代表者によって文明を築くこと，そして良い見本となるようなコミュニティにとって有用な人々の人口比を高めることを目的としている．この目的のために，人種の生得的質の改良と向上について探求する科学が「優生学」なのであった．

ゴルトンは「優生学」の定義と目的だけではなく，社会学会と「優生学」とが進むべき道として，その展望も述べており，五つのことが挙げられている．①遺伝の諸法則 (the laws of heredity) に関する既存の知識の普及と，さらなる研究の促進．特に統計を用いた研究の促進．②さまざまな社会の階級が人口に占めた比率についての歴史的な研究．③繁栄している大家系を生み出した条件の調査．つまり，「優生学」を可能にする条件 (conditions) について，統計的な研究に資するような事実の調査．特に結婚した時点での両親の身分についての情報の収集．④結婚に作用する諸影響の研究．⑤「優生学」の国家的重要性について説き続けること．そのためには三段階があり，科学としての優生学の確立，実践としての優生学の必要性への認識，そして新しい宗教のように国民意識 (the national conscience) へ取り込まれること，が必要となる．

これらの展望においては，ゴルトンが「優生学」において，実証の手段として統計を重要だと考えていたことがにじみ出ている．統計の重要性は，個々の優れた血統（繁栄している大家系）についての調査や，人口における階級の比率についての研究にとどまらない．遺伝の法則についても統計として数学的に扱うことが提唱されている．こうした統計的な研究に

基づき，実際に有用な階級の人口比を高めるために，結婚に焦点があてられるのである．しかし優生学的見地から適した結婚が広く行われるようになるには，優生学の国家的重要性について広く承認され，そして実践される必要があった．その文脈では「自然の営為と共働するもの」として，「優生学」を宗教のようなものにすることまで提唱されている．ここでは自然科学が，キリスト教的な世界観に取って代わろうとしていることが示されている．さらにゴルトンは，「自然が無分別に，時間をかけ，そして無慈悲に行っていることを，人間は将来に備え，迅速に，思いやりをもって実行できるかもしれない」と述べることで，人間の力（人為淘汰）が自然淘汰より勝ることを示唆するのであった．このようにゴルトンの「優生学」は，遺伝の諸法則や淘汰というアイディアを人間社会へと適用するものであったのは明らかである．

それでは優生学とならぶ応用社会学として位置づけられていたゲデスの「都市学」はいかなるものだったのだろうか．「都市学」を検討することで，「優生学」との「重なり合い」を検証してゆこう．

3-2　ゲデスの都市学における優生学の位置

ゲデスは，ゴルトンの「優生学」報告の２カ月後，７月18日の社会学会において「都市学――応用社会学の試み」の第一報告を発表している(Geddes, 1905)．このゲデスの報告については，「ゲデスは，〔中略〕フランシス・ゴルトン氏の優生学も都市学のための枠組みとして見逃してはいない」．「ゲデス自身は論文の中で，優生学を彼の主題である都市学の全体としての目的として語っていた」とメラーによって指摘されていた．果たして「優生学」が都市学の目的であり，議論の枠組みであったのだろうか．まずは，ゲデスの報告の中から「優生学」がどのように位置づけられているのかを見てゆこう．

ゲデスは，この報告の冒頭の段落で，応用社会学あるいは都市学を次の

ように定義している.「応用社会学一般，またはその主要な一分野としての都市学は，社会調査 (Social Survey) の社会事業 (Social Service) への応用として定義できる」(Geddes, 1905: 103–4). ゲデスにとって，この社会調査にあたるものが，「好奇心旺盛な逍遥する観察者の経験」をもとにして得られる「地域調査 (Regional Survey)」である．ここで強調されるのは，このような「科学」の側面だけではなく，それを実践へと関係づけること，つまり「技芸 (art)」の側面である．この技芸として位置づけられるのが，地域事業 (Regional Service) であり，社会事業である.

ゲデスによれば，科学と技芸の関係は様々な場面で認識され始めていた．化学と農業，生物学と医学，さらに人口統計と公衆衛生や，商業統計と政治などが，その例として挙げられている．そして「科学的な人口統計学と実践的な優生学」との関係を，社会学の水準における科学と技芸の関係として挙げ，それは（おそらくゴルトンの報告によって）始まったばかりのものだとしている．ゲデスにとって優生学は科学的な知見に基づいた実践であり，その意味で都市学と同じ応用社会学であった.

このように優生学を同じ応用社会学として意識した上でゲデスは，都市学と優生学との間に，凝集としてコミュニティを捉える研究である優生学と，統合体としてコミュニティを捉える研究である都市学という違いを示している.「〔優生学のような〕凝集としてのコミュニティについての研究は，統合体としてのコミュニティについての研究の中に，〔中略〕対称的で補完的なものを見出す．つまり，われわれはそれを都市 (the City) と呼ぶものの中に見出すのである」(Geddes, 1905: 104). 思い切って言い換えれば，ミクロな個人個人の集積としてコミュニティを考える研究と，全体を一つの有機体としてコミュニティを考える研究の違いである．確かに優生学が目的とする「コミュニティにいる個人個人の改良」に応じて「都市が進歩する」のであるが，「改良的淘汰，つまりいまのところ優生学として個人に照準されたものは，対応する市政の技芸 (civic art) と切り離

すことができない」と述べられている．つまり，優生学が個人を改良することが，即ち都市の改良につながるわけではない．個人を改良する優生学と都市を改良する都市学とは，相補的な関係にあるのだと言われているのである．

このようにゲデスにとって，優生学は応用社会学のサブカテゴリーとして都市学と並置されていたのであって，都市学は優生学を目的として位置づけているわけではなかった．そしてゲデスは後年，都市研究に関する主著『進化する都市』(1915年) において，次のような言葉で本論を閉じている．

「進化する都市 (Cities in Evolution) と進化する人々(People in Evolution) は，手を携えて進歩してゆくのである．」(Geddes, [1915] 1971: 392=1982: 338)

3−3　都市学と優生学との重合と乖離——遺伝と環境

都市学は優生学を知的基盤のようなものとして考えているわけではなかった．少なくともゴルトン報告の2カ月後に行われたゲデスの第1報告においては，都市学も優生学もどちらかがより基底的となるような関係ではなかった．両者は相補的な関係にあった．このような関係性を別の側面から解釈することができる．それは「遺伝 / 環境」，あるいは「氏か育ちか」の二項対立に対する意義で，優生学が遺伝を重視し，それに対して都市学が環境を重視している，というような見方である．

ゴルトン報告では明らかに遺伝が重視されている．何よりもその定義において，「生得的質 (the inborn qualities)」を改良するのだと述べられている．確かに，道徳的な人格はこの生得的質の均衡によって良し悪しが判断され，その均衡の形成は教育により影響を受けると指摘されている．けれども，教育により影響を受ける部分の良し悪しについては，解決をみない議論に巻き込まれるだけなので，「優生学」の対象とはされていない．

遺伝が重視されているのは，その展望において第一に挙げられているのが「遺伝の諸法則」についてであることからも明白である．さらにゴルトンは「優生学」の目的として，最良の見本として代表された人々に，「それぞれのやり方で共通の文明を築きあげることを任せること」を挙げている．ここには，優れた人々が望ましい文明や社会を築く，という前提が見て取れる．ゴルトンが「社会的 social」なものに着目するのは，望ましい結婚へと導くための影響力について言及する部分だけである．つまり科学としての「優生学」ではなく，その実践の場面に限られているのである．

他方でゲデスは，実践的な都市学の問いを「特定の歴史的な類型や，市民全体の社会編成，そして社会的影響を重視する」ものだとしている．「社会編成は具体的な活動を通して，市民全体に影響」するのであり，「われわれの行動は一般的に過去あるいは現在の社会編成によって形成される」のである (Geddes, 1905: 113f〔E 節〕)．このように個人の力や「遺伝」に対して社会（あるいは環境）を重視しているのは，都市学の「実践」の側面である．そしてそれは「優生学」が実践においては社会の影響力に言及しているのと同じように思われるかもしれない．ゲデスが歴史を重視することは，個人において遺伝を重視することと類似の発想だとも考えられなくもない．けれどもゲデスがゴルトンと異なるのは，都市学の「科学」の側面においても環境を蔑ろにはしていないことである．

都市学における「科学」の側面にあたるのは社会調査であるが，それは「好奇心旺盛な逍遥する観察者の経験」をもとにして得られる「地域調査」と呼ばれている．ゲデスの都市学における地域調査は，自然研究者 (naturalist) のような観察に基づく，都市への地理学的調査と歴史学的調査によってもたらされるものなのである．都市の歴史を過去から受け継がれたという意味での遺伝的側面とすれば，その地理的要因は環境的側面だと言えるであろう．そして地理的要因は，「個人主義を生む条件」ともなっていると言及している (Geddes, 1905: 108〔B 節〕)．つまり，ゲデスは

(都市の) 進化あるいは生命の営為を，遺伝と環境の両面から研究することを目指していたのであり，人間の精神も環境（地理的条件）に影響を受けていると考えていたのである．「都市の生命 (city's life) における地理的要素と歴史的要素がわかるということは，現在についての理解を進める最初のステップである」(Geddes, 1905: 115〔E節〕).

初年度のロンドン社会学会における両者の報告だけではそれぞれの議論の深みは明らかになっていないが，ハリデイ (R. J. Halliday) は次のように指摘している．「〔都市学派にとって〕社会学は自然環境と人間との相互作用を扱う科学的研究であった．それゆえ，生物学――それも有機体と環境との相互作用を認めないヴァイスマン (Weismann) 学説のような生物学――は，真に科学的な社会学とは対立関係にあった．人種学派〔優生学派〕の社会学と都市学派の社会学が同じ道を進んでいたという確証は，ない」(Halliday, 1968: 385).「優生学」報告においては必ずしも明示されていないが，ゴルトンの遺伝に関する考え方は，ヴァイスマンと同じようなものだと言われている[15] (Kevles, 1985=1993: 35). そして都市学の主張からこのようなハリデイの指摘を裏づけるのは，ゲデスが『進化する都市』で示している次のような優生学に対する態度である．「優生学が血液型や血統でもって「退化動物」と考えたり，分類したりしがちなものも本当は単質低下に過ぎず，それは環境の抑圧に対する対応」なのだという (Geddes, 1915=1982: 335). つまり，優生学によって劣っているとされているものは，遺伝的要因によるのではなく，環境的要因によるのだとい

[15] ヴァイスマンは，「生存闘争を生命の諸現象に普遍化し，いわゆる「自然選択の万能 (Allnacht Naturzuchtung)」を唱えたことで知られている」．ダーウィンは進化の要因として獲得形質の遺伝も認めるなど，それを自然選択（淘汰）だけに限定したわけではなかったが，ヴァイスマンは獲得形質の遺伝を認めなかったことを重視して，ネオ・ダーウィニズムと呼ばれる．なお獲得形質の遺伝をめぐってスペンサーとの間で1890年代に論争が交わされた（八杉, 1994: 353ff).

う．ここでは人間の能力が，環境から影響を受けるものだとされているのがわかる．

こうした都市学と優生学との違いは，その「科学」観にも反映されていると言われている．ハリデイは次のように述べている．「都市学派は，単純な生物学的メカニズムと社会「法則」――例えば，自然淘汰と生存競争――とを関連させることはなかった．〔中略〕ゲデスは，生物学的メカニズムを社会法則の身分にまで高めることを誤用だと考えていた．〔中略〕それは，社会学も生物学も純粋に経験的(empirical)あるいは価値自由(value-free)でなければならないからではなく，いずれの科学も基本的に統一性(unity)の分析に関わらねばならないからである．ゲデスにとって，科学の役割は統一(unification)と一般化(generalization)であった」．それゆえ，優生学のように，自然淘汰や遺伝といった「特定の限定されたメカニズムによる社会の分析は，まったくもって非科学的なのであった」(Halliday, 1968: 385f)．つまり，都市学と優生学は「科学」の側面においても，大きく異なるものだったのである．

ゴルトンが自然の営為（淘汰）を社会へと適用する社会ダーウィニズムであったのは明らかである．また統計を重視する実証主義者でもあった．ゲデスも都市を対象とする上で，都市を一つの生命有機体として見るような生物学的な比喩が使われている．何よりも都市を「社会の進化」という枠組みで捉えているもので[16]，社会ダーウィニズムと言えなくもない．さらに科学的な実証の側面としても調査の必要性が説かれている．このような意味において，ゲデスとゴルトンは確かに「社会ダーウィニズム」と「実証主義」という共通項を持っている．しかしながら，同じように社会の進歩を考える上で，進化という生物学的な概念を援用しつつも，その内

[16] 例えば，「エディンバラ旧市街はもっとも濃密な事例であり，社会進化の縮図を至る所に見ることができる」というような表現があてはまる(Geddes, 1905: 109〔B節〕)．

実は重なるものではなかった．さらに実証の方法，つまり「科学」観は大きく異なっていた．要するに，両者の重なり合いは具体的な次元においてでは見られず，抽象的な次元におけるものでしかなかったのである．そして抽象的な次元で両者が共有していたとはっきりと言えるのは，都市や人種を進歩させる（退化させない）ということ，つまり進歩の観念だけであった[17]．

優生学と都市学あるいは社会学との接点は，曖昧な輪郭しか持たない「社会ダーウィニズム[18]」だけだった．そして，この時代には広く進歩や「社会ダーウィニズム」が注目されていた．そうだとすると，なぜ第一回ロンドン社会学会だったのか，という問いを考えるにあたって，「社会ダーウィニズム」が優生学と社会学を結びつけたのだ，という解答が意味を成さなくなる．進歩や進化，「社会ダーウィニズム」を考慮に入れる学問領域であれば，ゴルトンが報告する場はどこでもよかったのではないだろうか．にもかかわらず「社会学会」が選ばれた理由は何であったのだろうか．

4.　ロンドン社会学会とゴルトン「優生学」との重なり合い

ブライス (James Bryce) は『*Sociological Papers*』所収の論文で，社会学会を設立する目的とその意義を挙げている．なかでも第一の目的として，社会の新たな側面を描き出すような社会調査が多く現れていることを踏まえ，こうした新たに立ち上がる人間についての科学的探究を，それが

[17] ボウラーは，このヴィクトリア時代こそ，過去に魅了され，進歩という観念が重要になった時代だと指摘している．現在，われわれに馴染み深い進歩という観念は，ヴィクトリア時代において，あらゆるものを歴史的に序列化する中で「発明」されたものであった (Bowler, 1989=1995).

[18] 「社会ダーウィニズム」という言葉自体が様々な考え方を内包しており，明確な定義を与えることの困難を示しているものとして，ハリデイの論考 (Halliday, 1971) がある．ボウラーも同様に「社会ダーウィニズム」というイメージの曖昧さを指摘している (Bowler, 1984=1987: 455f).

成熟するまで育成する包括的な学会が必要であることを挙げている．そして，新しい人間についての科学の一つとして，優生学が挙げられている (Bryce, 1905)．ここに優生学に対する期待を読み取ることができる．それ以上に，言葉通りに理解するならば，優生学のために社会学会があると考えることさえできる．

同じく『*Sociological Papers*』の序文においては，ゴルトンへの謝意が示されている．一つは（「優生学」報告とは別に）ゴルトンの論文を収録することができたことに対して．そしてもう一つが，学会設立に際してのゴルトンの尽力に対してだった．ハリデイが示したように，ロンドン社会学会の創設に際しては，ゲデスやブランフォードらの都市学派，ホブハウスらのソーシャルワーク学派，そしてゴルトンらの優生学派という三つの異なる領域が並存していた[19] (Halliday, 1968)．その中で，「優生学派の参加は，当然のこととして迎えられた」と言われている（米本，1989: 82)．しかしながら，ここまで見てきたように，少なくとも都市学と優生学との間には，両者を結びつける学問的必然性は希薄であった．それでは，優生学と社会学会を結びつけた磁力は何だったのだろうか．

ゴルトンは『回想録』で自らの「優生学」報告について，1904年と1905年に社会学会で報告 (lecture) を行ったという事実しか述べていない (Galton, 1908: 321)．しかしながら，1907年6月にオックスフォード大学で行ったハーバード・スペンサー記念講演では，「新しく設立された社会学会から報告を頼まれていたので」，「優生学」報告を行ったと記している．そして，「優生学という主題が本格的に始動し，機も熟したので」，ロンドン大学に優生学の資する研究員ポストを設立するために「わずかながらの寄付を申し出た」のだという (Galton, 1909: 79f)．

---

[19] ハリデイの論考が目指していたのは，「ダーウィニスト」や「実証主義者 (Positivist)」という社会学に対する特徴づけを用いずに，当時の社会学会の内実を記述することであった (Halliday, 1968: 377)．

ゴルトンの報告後に行われた議論には，生物学者ウェルダン，H. G. ウェルズ，ベンジャミン・キッド[20]らが参加し，人類学者ウィリアム・ベイトソンやバーナード・ショウ，社会学会からはホブハウスやロバートソンらも書簡によるコメントを寄せている．それだけではない．この報告論文の抜粋が5月26日付けの『*Nature*』誌 (Vol. 70 No. 1804) に掲載される．さらに海を渡り，現在も続く『*The American Journal of Sociology* (AJS)』の1904年7月号には，翌年『*Sociological Papers*』に掲載されたもの (Galton, 1905) と同じものが全文掲載されている[21]．『AJS』には，1905年にロンドン社会学会で行った報告も全文掲載されている．

こうしてゴルトンは優生学の提唱者として有名になった．これを契機にして，1907年に優生運動の啓蒙団体として優生教育協会 (Eugenics Education Society[22]) が設立されたのだった（松原，2002b: 209）．それだけではなく，ゴルトン自身が記していたとおり，彼の資金によって，実際に優生学を進めてゆくための研究機関が設立された．それがロンドン大学のユニヴァーシティ・カレッジに新設された優生学記録局 (the Eugenics Record Office) と研究員ポストである．ロンドン大学から研究室の提供を

[20] 英文学者の富山太佳夫は，『社会の進化 (Social Evolution)』の著者であるキッドについて，彼が社会ダーウィニズムの典型を示したことを書いている（富山，1995: 207–22）．

[21] 「優生学」論文は，1904年7月号（10巻1号）の巻頭を飾っている．この巻号では，ゴルトンの論文に続いて，スモール (Small) の論文 "The Scope of Sociology. IX. Premises of Practical Sociology" が掲載されている．

[22] 優生教育協会は，1926年に優生学協会 (Eugenics Society) に改称，また1989年にはゴルトン研究所 (Galton Institute) と再び改称され現在に至っている．ゴルトン自身は優生教育協会の初代名誉会長である．さらに現代専門職論の嚆矢と言われている『*The Professions*』の共著者であるカー＝ソンダース (Alexander M. Carr-Saunders) は優生学協会の会長を1949年から1953年まで務めている (Keynes (ed.), 1993: 228)．社会学と優生学とを結ぶ糸がここにも垣間見える．

受け，ゴルトンが年間500ポンドを資金として提供し，国民優生学(national eugenics)についての研究員ポストができたのだった．この資金提供の申し出が受け入れられたのが，1904年10月だった．この記録局は，当初ゴルトンがディレクターを務めていたが，80歳を超えていたゴルトンは1906年にその座をピアソンに譲り，フランシス・ゴルトン国民優生学研究所(Francis Galton Laboratory for the Study of National Eugenics)として刷新された[23](Jones, 1993: 190f)．そして1911年にゴルトンが世を去ると，遺言で遺産のかなりの部分がユニヴァーシティ・カレッジに寄付され，ゴルトン記念優生学講座(Galton Professorship of Eugenics)が設置されている[24]．

このようにゴルトンは1904年の「優生学」報告によって，「優生学」の主唱者として有名になった．ゴルトンだけではなく「優生学」自体も，この報告が契機となって研究機関やポストの創設，さらには優生教育協会の設立が導かれ，学問領域として，また社会的な運動としての認知を得たのだった．ゴルトンは「優生学」報告の中で「広く一般の知識人の承認を得ること」をもっとも重要なこととしていたが，「優生学」はその承認を得ていったのだと言える[25]．ゴルトン自身の資金に加えて学として社会的

---

[23] この背景には，ゴルトンやピアソンの初代研究員への失望があったとも伝えられている(Kevles, 1985=1993: 70)．

[24] その初代教授に着任したピアソンは，この講座を応用統計学科へと発展させた．ケヴルズは次のように述べている．「ピアソンの応用統計学科が成し遂げた仕事は，健全な統計科学と，人間遺伝についての常に偏った研究との混合物であったともいえる．さりながら，ピアソンの応用統計学科は二〇世紀初頭の時点で，イギリスにおけるただひとつの優生学研究機関かつ正統的な優生科学の研究の源泉であり，イギリスの優生思想の議論のすべての科学的出発点だったのである」(Kevles, 1985=1988: 74)．

[25] 優生学のこのような制度化をより広い視点から捉えれば，「生物学」が学として成立するために必要だった社会的認知と制度化の一つだったとも言える(林・廣野，2002)．

認知を得たこと，それが新たに創設された社会学会で「優生学」報告を行ったことの意義であった．ゴルトンが求めていた社会的認知を得るための場を提供したのが社会学会だった．

それでは，社会学会はゴルトンと「優生学」に何を求めていたのだろうか．生物学的な理論枠組みが求められていたのでなければ，両者を結びつけていたものは何だったのだろうか．

ゲデスの都市学を含む社会学一般も，優生学と同様に新興の社会科学であったとすれば，優生学と同様に，資金と学問としての認知を求めていたと考えられる．そして既に見てきたように，優生学にはゴルトンからの資金があった．それゆえ，社会学会を通して社会的認知を得ることを目的としていたのだった．それに対してゲデスの都市学はどうであったのだろうか．メラーによれば，社会学会の設立に奔走したブランフォードはゲデスの薫陶を受けており，ゲデスの都市学というアイディアを実現するよう尽力していた．しかしゲデスは彼のアイディアの後ろ盾となる資金を持たず，また学問としての認知もなかった．そして既に優生学との理論的な共通性を見出すことは難しかった[26]．そこで，ゲデスは聴衆からの支援を得るために，「実践家 (man of action)」たることを強調せねばならなかった (Meller, 1990: 142)．ゲデスのこのような状況を考慮すると，社会学会，そしてゲデスの都市学が必要としていたのは資金と学としての認知であり，優生学はそのための「広告塔」のようなものだったと考えられるのではないだろうか．

そのように考えると，ブライスが社会学会の目的の第一に付随して優生学を挙げたことも，最初の報告者がゴルトンであったことも，そして『*So-*

[26] 既にみたようにメラーの1979年の論考においては，優生学が都市学の理論的枠組みを提供していたかのように指摘されていた (Meller, 1979)．それが1990年の論考においては，両者の理論的な共通性を示す直接的な表現を用いなくなっている．ゲデス自身が優生学と都市学とを結びつけて考えている枠組みは，理解するには複雑だったのだという (Meller, 1990: 142f)．

ciological Papers』の序文でゴルトンにだけ謝意が述べられていることも，それぞれ理解できる．社会学会は優生学とゴルトンを宣伝することによって，自らの学会としての目的を果たさねばならなかったのだ．ゴルトンは社会学会に利用されたのだろうが，他方で社会学会を利用もしていた．その結果が優生学の認知へとつながったのだった．

「優生学」報告の際に議長（司会）を務めたのはピアソンだった．彼は「優生学」報告を受けてのディスカッションの冒頭で，自らは社会学会会員ではないことを述べ，さらに社会学会の創設は時期尚早であると指摘した．ピアソンは社会学会の人々に冷や水を浴びせるような発言をしたのだった[27]．このような発言がなされるということは，「優生学」と社会学会との関係は，われわれの想像以上に希薄だったのかもしれない．一方で，ゴルトンの報告後のディスカッションや書簡によるコメントに，ゲデスの名前はない．ホブハウス，ロバートソン，ベンジャミン・キッドら『*Sociological Papers*』の編集委員会の面々の多くがゴルトンにコメントを寄せている中，同じように編集委員会に名を連ねているゲデスからのコメントはない．そしてもちろん，ゲデスの報告に対してゴルトンもコメントを寄せていない．これは優生学と都市学との間に，周囲が期待するほどの重なり合いはなかったことを示しているのではないかと思われる．社会学会あるいは都市学と優生学とは，新興の学問領域として資金と社会的認知を必要としていた．それらを得ること，その共通の目的により，理論枠組みや学派を越えて結び付けられていたのだと言えるだろう．

5. 現代の社会学へ——「法則」と「型」

ゲデスの都市学とゴルトンの優生学は同じ「社会ダーウィニズム」，つ

[27]「優生学」報告に続く「ディスカッション」におけるピアソンの発言．『*Sociological Papers* (1904)』の52頁参照．なおブランフォードは，このピアソンの発言に対し，「優生学」報告よりも長いコメントを同じ巻号に寄稿している．

まり進化論の社会への適用を同じように行っていると思われた．両者とも社会のさらなる進歩を目指して，都市の進化（都市学）や人種の進化（優生学）を語っていた．しかしながら，詳しくみると両者の類似よりも相違が目立っていた．なかでも「科学」観の相違は重要である．なぜなら，ゲデスの都市学において，ユートピア (utopia) について手厚く言及され，かつ「真のユートピア (Eu-topia)」と「オートピア (ou-topia)」との区別が導入されていたこととも通底しているからだ．

都市あるいは社会の進化を考えるとき，よりよい状態へと進むこと――つまり，進化の次の段階へと進むこと――が目指される．それでは，より「よい」状態とは何か．進化した先に見える「望ましい社会」，「理想的な社会」とはどのように構想されるのか．この構想の方法にも，都市学と優生学の相違があり，それが「科学」観と密接に関わっている．

優生学においては，まず個々人の集積として社会（あるいは国家）が想定されている．それゆえ，よりよい社会の構想は，よりよい個人の質が何かを見極めることである．そして，よりよい個人の質とは何かと言えば，それは現在において眼前に見出される優れた資質である[28]．そしてこの優れた資質へと人々を高めること，また優れた資質を持つ人々の比率を高めること，それを扱う科学が優生学であった．「われわれは人類の最終的な運命を知らない」(Galton, 1905: 50) がゆえに，遺伝や進化などの「科学」的な「法則」を探求し，より「よい」未来へと向かわねばならなかった．

一方で，ゲデスの都市学において重視されるのは，「ユートピア

[28] 例えば次のような部分に現れている．「優生学の実践が今後，われわれの国民の平均的な質を，現在の国民の中でのより良い部分〔の水準〕にまで高めると想定して，〔以下略〕」(Galton, 1905: 47)．ここからは，「現在の国民の中での良い部分」まで，将来的に国民の平均的な質を高めることが優生学の実践と考えられていること，つまり「現在での良い部分」が優れた資質の基準となっていることが読み取れるだろう．

(utopia) の文学」である．都市の理想像は，従来ユートピア文学によってさまざまに示されてきた．しかしながらユートピアとして，実現不可能なものを描き出しても意味はない．それはユートピアではなく，「オートピア (ou-topia)」となってしまう．ゲデスが「真のユートピア (Eu-topia)」，つまり「優れた場所」という新たな言葉を示したのは，それを実現可能なものとせねばならなかったからである．ゲデスは「理想的な都市（社会)」を想像力の中に求め，その実現可能性を科学と技芸 (art) の総体としての「科学」が担保するのだった．そして地理的で歴史的な個性を持つ都市には，それぞれの理想像が存在する．それゆえに，ゲデスにとっての「科学」が探求すべきは，その都市固有の発展の「型」であり，都市それぞれの「過去，現在，未来」を示す『都市百科事典 (Encyclopaedia Civica)』が必要とされたのだった (Geddes, 1905: 118).

「法則」としての「科学」を進めたゴルトンが次のように述べるとき，われわれは改めて「優生学」を問い直すことの重要性に気づく．「自然が無分別に，時間をかけ，そして無慈悲に行っていることを，人間は将来に備え，迅速に，思いやりをもって実行できるかもしれないのだ．これは人間の力の及ぶ範囲であるのだから，その方向へと努力することはわれわれの義務となろう．それはちょうど，不幸に遭った隣人に援助することが人の義務であることと同じである」(Galton, 1905: 50). 科学技術が生命を対象化する際に，「力の及ぶ範囲」の限り「努力する」ことにはいかなる意義があるのか．それが目指す方向には，どのような価値判断が伏在しているのか．そして「理想」はどのように構想されているのか．ゴルトンの「優生学」報告がなされた1904年は，マックス・ヴェーバー (Max Weber) が有名な「客観性」論文を発表した年でもあった．社会学は経験科学として，価値判断の妥当性を問うことはしない．けれども，現代社会の価値判断や秩序の体系を対象化し，その「型」を明らかにすることは，社会学の変わらぬ課題として残されているのではないだろうか．

文　　献

Adams, Mark B., 1990, *The Wellborn Science: Eugenics in Germany, France, Brazil, and Russia*, Oxford University Press. (＝佐藤雅彦訳, 1998,『比較「優生学」史の展開』現代書館.)

Ambroselli, Claire, 1988, *L'éthique médicale* (Collection QUE SAIS-JE? N° 2422), Presses Universitaires de France. (＝中川米造訳, 1993,『医の倫理』白水社).

Bowler, Peter J., 1989, *The Invention of Progress: Victorians and the Past*, Basil Blackwell. (＝岡嵜修訳, 1995,『進歩の発明――ヴィクトリア時代の歴史意識』平凡社.)

――――, 1984, *Evolution, The History of an Idea*, University of California Press. (＝鈴木善次ほか訳, 1987,『進化思想の歴史（上・下)』朝日新聞社.)

Bryce, James, 1905, "Introductory Address," *Sociological Papers 1904* (1905): xv–xviii. (翻訳は『哲学』本号に所収).

Galton, Francis, [1883] 2001, *Inquiries into Human Faculty and Its Development*, electronic edition (based on Second Edition), Gavan Tredoux (ed.), http://galton.org/ (Originally published in 1883 by Macmillan, Second Edition, 1907 by J. M. Dent & Co. (Everyman)).

――――, 1905, "Eugenics: Its Definition, Scope and Aims," *Sociological Papers* I (1904): 45–50. Also in his (1909): 35–43. (翻訳は『哲学』本号に所収).

――――, 1908, *Memories of My Life*, Methuen.

――――, 1909, *Essays in Eugenics*, The Eugenics Education Society.

Geddes, Patrick, 1905, "Civics: As Applied Sociology," *Sociological Papers 1904* (1905): 103–18. (翻訳は『哲学』本号に所収).

――――, [1915] 1971, *Cities in evolution: An introduction to the town planning movement and to the study of civics*, Harper & Row Publishers. (Originally published in 1915.) (＝西村一朗・他訳, 1982,『進化する都市』鹿島出版会.)

Halliday, R. J., 1968, "The Sociological Movement, The Sociological Society and the Genesis of Academic Sociology in Britain," *The Sociological Review*, 16(3), New Series: 377–98.

――――, 1971, "Social Darwinism: A Definitions," *Victorian Studies*, 14 (4):

389–405.
林　真理・廣野喜幸，2002,「近代生物学の思想的・社会的成立条件」 廣野ほか編：1–34.
廣野喜幸・市野川容孝・林　真理編，2002,『生命科学の近現代史』勁草書房.
Jones, J. S., 1993, "The Galton Laboratory, University College London," in Keynes (ed.) : 190–5.
金森　修，2000,『サイエンス・ウォーズ』東京大学出版会.
————，2002,「科学知識の社会学」金森修・中島秀人編『科学論の現在』勁草書房.
Kevles, Daniel J., 1985, *In the name of eugenics: Genetics and the uses of human heredity*, University of California Press.（＝西俣総平訳，1993,『優生学の名のもとに――「人種改良」の悪夢の百年』朝日新聞社.）
Keynes, Milo (ed.), 1993, *Sir Francis Galton, FRS: The Legacy of His Ideas*, The Galton Institute.
Lock, Margaret, 2002, "Utopias of health eugenics, and germline engineering," in Mark Nichter and Margaret Lock (eds.), *New Horizons in Medical Anthropology: Essays in Honour of Charles Leslie*, Routledge: 240–66.（＝押小路忠昭訳（抄訳），2004,「優生学と遺伝子工学のユートピア」『現代思想』32巻14号（2004年11月号），青土社：190–210.
MacKenzie, Donald A., 1981, *Statistics in Britain 1865–1930: The Social Construction of Scientific Knowledge*, Edinburgh University Press.
松原洋子，2002a,「優生学」市野川容孝編『生命倫理とは何か』平凡社.
————，2002b,「優生学の歴史」廣野ほか編：199–226.
Meller, Helen E., 1979, "Note to CIVICS: AS APPLIED SOCIOLOGY Part I & II," in Meller (ed.), *The Ideal City*, Leicester University Press, 1979: 67–74.
————，1990, *Patrick Geddes: Social evolutionist and city planner*, Routledge.
岡本春一，1987,『フランシス・ゴールトンの研究』（大羽ほか編）ナカニシヤ出版.
鈴木善次，1983,『日本の優生学――その思想と運動の軌跡』三共出版.
————，1991,「進化思想と優生学」柴谷篤弘・長野敬・養老孟司編『講座　進化②　進化思想と社会』東京大学出版会.
富山太佳夫，1995,『ダーウィンの世紀末』青土社.
八杉龍一編訳，1994,『ダーウィニズム論集』岩波文庫，岩波書店.
米本昌平，1989,『遺伝管理社会――ナチスと近未来』弘文堂.

米本昌平・松原洋子・橳島次郎・市野川容孝，2000，『優生学と人間社会』講談社.

参考：Galtonの著作のほとんどが電子化され公開されているGalton.org
http://www.mugu.com/galton/index.html